

## 45周年に寄せて

(公社) 空気調和・衛生工学会北信越支部  
特別会員 西村 豊治

振り返れば時の経つのは早いもので、当工学会北信越支部も設立45周年を迎え、伝統と権威ある工学会支部の記念誌発刊に際し寄稿させて頂く榮譽に感謝しております。

『回顧録－最高の回り道』（工学会誌2012年10月号）に掲載したが、私は測量や土地家屋調査士を学んだ土木業が本来のなりわい生業であり、建設省等の土木業務に進むべきところ出発点を間違え（詳細は割愛）建築設備の道に入ったものであります。昭和38年に地方の役所を辞職し富山県西部でビル設備工事会社を設立する考えがあり、再就職したのは富山市にある丸喜工業という配管工事会社でした。通勤には片道1時間がかかり、車中では井上宇一著の「建築設備ポケットブック」を学び、昭和41年2月9日付で当工学会の設備士に合格したことが私の人生の進路を決定づけた。

私が工学会に入会したのは当支部設立前の昭和41年で丸喜工業の松井社長命令だった。当時、長野市の浦野善之助氏は当北信越ブロック設立を目指しておられ、地区会員の拡大に努力されていた頃であります。一方で浦野氏は富山の北陸銀行と取引があり銀行の旅行会で偶然にも松井社長と寝台車で向かい合わせになり、富山県での会員拡大を依頼されたと聞いたことがあります。

昭和45年に富山県で当支部の総会があり、本部より渡辺要会長を迎え、私は裏方役で総会を進めていましたが、翌日の研修会は黒部峡谷へトロッコ電車で行く予定でした。ところが前夜の豪雨で土砂崩れがあり、トロッコ電車は不通となり急遽、魚津市にある「魚津埋没林博物館」の研修に切り替えた。この博物館は数万年もの古来から、黒部川の伏流水で生息していた杉の埋没古木を展示していたが、その時、渡辺会長は「黒部峡谷へ行きたかった」と寂しく漏らされた記憶がある。また、昭和49年の富山での総会には小林陽太郎会長が出席された。その翌日は6月の青い天を頂き、緑のトンネルを遡り黒部峡谷の櫛平まで案内した。参加された皆さんに「帰りの汽車の予定もありましょうから次の電車で帰りましょう」と申し上げると、小林会長は俳句を詠んでおられるようで、「西村さん、皆さん。こんな絶景は二度とは見れない。此处で自由解散にしましょう」と提案され、大半の会員が釣鐘温泉へと向かわれた思い出は懐かしい。

さて、昭和40年代の「学会設備士」は官公庁から「設備技術者として一定の技術を習得した者」として評価され入札等の要件に取上げていた。ところが平成10年、建設省告示で「建築設備士」が制定された。従来の学会設備士と新設された建築設備士は共に設備技術の向上を計る目的を共有した同義語であるが、微妙に違うといえるのは文部省が主管する「学界設備士」は工学的理論、即ち【理】への研鑽であることに対し、建設省が主管する「建築設備士」は建物における設備の施工及び設計において一定の技術を習得した証としての認定、即ち【利】につながる資格であると思います。両設備士に係わりのある私たち建築設備士は、技術者協会の世話役に回り、志ある者が誰でも加入できる工学会には、業界を束ねる管工事施工業関連の皆さんに参加をいただき工学界の裾野を広めてきたつもりであります。この両設備士も社会的地位は確立されておらず、特に「設備設計一級建築士」なる建築士法の改悪は社会のニーズに応えたものではなく、特に設計業界では設備・電気を専攻する青年に夢が持てない社会の到来をもたらしたと感じています。支部設立45周年にあたり私の存念を申し上げたが、業界の将来を考える時、今一度、関係者が共に心を出すべきであると信じています。最後に当協会の繁栄をお祈り申し上げます。